

それを思い出しながら、僕は、その米を、持ってきたカバンに詰めた。その時、おばが、「これ食べるか」と声をかけた。見ると、僕の好きな、串だんごだ。

「何本でもええよ、好きなだけ、お食べ。」と、おばは、僕の目の前で、蜜たぶり入った串だんごの包みを開けた。

おばに、いろいろ、よばれた。五時頃に家に着く。

水風呂にまた入り、汗を落とし、また、ごはん食べて、食後、すぐに、コッテンするつもりで部屋へ戻った。

部屋に入って、僕は、はっとした。

机の上の帳面、彼女の名がいっぱい書いてあるのが、開きっ放しだ。

誰かに見られたかな。それとも、自分がぼけていたか。

夕べは遅かったが、寝不足でも勉強。予定通り、真夜中起床で、朝まで勉強。予定の数学、物理、英語の勉強、したつもりだが、どうも、煩惱が多く、中身の薄い勉強だったかも。知らず、知らず、勉強ノートに彼女の名をいっぱい書いたままだった。

自分がぼけていたか